

新入会員紹介



みなさん、こんにちは。今年4月の中原寺入門に続き、7月に盛田会長のご案内で伝統ある壮年会に入会させて頂きました、見島佳守と申します。

かつて、九州赴任の折、木更津にある妻の実家に時折里帰りをしておりまして、そのつど菩提寺である浄土真宗本願寺派・證誠寺(狸ばやしのお寺)にお参りをし、ご住職とも親しくさせて頂きました。

十数年にわたる北海道・九州勤務の後、東京に転勤(市川在住)。その際、證誠寺ご住職から中原寺への紹介頂きました。

そのころの日本経済は、高度成長期の真只中で、「先進国に追いつけ、追い越せ」を合言葉に、その時代を生き抜いてきた同輩の例に違わず、私もまたがむしゃらに突っ走ってきたように感じています。

ワーカホリックからノーマルへと、積もったホコリを払い、余分なコロモを取り除きながら、今日まで、メンテナンスをしてきました。

この度、常々心に留めておりました「豊かなこころ作り」を、中原寺のご住職、前住職、坊守、そして壮年会の皆様

方とご縁で始めたところです。

浄土真宗は「ひたすら聴聞する」ことにより、宗門の「教義」を身につけていくことかと思えます。この基本的考え方にに基づき、日々精進する所存です。

趣味につきましては、専らサッカーの試合観戦。攻守所を変えながら試合が展開するダイナミズム溢れるプレイが魅力です。お酒は好きな方で、飲むほどに朗らか。若い時は一気飲みなど無茶飲みも多々ありましたが、一生分のお酒を飲み干した今は、程々に嗜む程度……。

夏場から猛威を振るってきた新型コロナウイルスは、ワクチン接種率アップと、飛沫感染対策(マスクの着用他)や接触感染対策(アルコール消毒類)などの徹底・習慣化により、新規感染者数は激減し、現在低位で推移。規制緩和も進み、行楽地、観光地、繁華街などに賑わいが戻りはじめ、社会全体に明るさが見えてきました。来年早々には、GO TOトラベルの開始など社会経済活動の本格化が計画されているようです。

一方、新変異ウイルスへの対応が今後も続くことから、いまだ収束点は見えず、コロナ明けが待ち遠しい!!

(見島 佳守 記)

新入会員紹介



昭和18年生まれ、78才を越えました。壮年の時代は過ぎ去り、もはや老年ですがお勧めもあって、厚かましく壮年会に入会させて頂きたく事になりました。

戦後の混乱期に物心の付いた世代で、私を含め同世代の多数派は中道左派でした。老化が進むにつれ、懐古の思いからか、保守指向が強まり、今は産経新聞を愛読する中道右派になっています。

老化現象で腰痛、難聴など年令相応に問題を抱えていますが、医者通いをするほどではなく、何とか我慢の範囲内に留まっています。

中原寺とご縁は親の代からで、50年近くになります。両親は安芸門徒と言われるほど浄土真宗の盛んな広島県の農村の出身です。特に母の実家は曾祖母と祖母がお寺の出身でお寺との縁が濃い家でした。

そこで育った母は、父と供に松戸に住居を移してから、中原寺とご縁を結び、婦人会でも長年お世話になっていました。その息子の私が78才まで何故壮年会に参加しなかったのかとお叱りを受けそうですが、宗教を忌避するような特段の考えがあった訳ではありません。単純に68才まで現役で、仕事を退いてからは母を介護していた事が主な理由です。

母は2年前に103才で亡くなりましたが、自宅でもつばら母に向き合って暮らす介護の生活は、貴重な良い経験であったと思っています。

現在は家内(婦人会に所属)と2人、年金が頼りの暮らしですが、時間だけはゆとりがあり、お寺の行事も出来るかぎり出席するように心掛けています。高齢ですが門徒としては、未熟な新人ですので、宜しくお願ひ致します。

(平 邦雄 記)

訃報のご案内

篠田 勝弘 様/令和3年7月13日に往生されました。
謹んで哀悼の意を表します。

訃報のご案内

小林 一男 様/令和3年9月26日に往生されました。
謹んで哀悼の意を表します。

編集後記(壮年会だより：令和3年12月「秋冬号」会報)

昨年からの新型コロナウイルス感染拡大で、壮年会法座も大きな影響を受けましたが、最近の新規感染者の急減で、三密回避に配慮しながら、壮年会法座や諸行事も開催できるようになりました。一日も早く元の日常をとり戻し、壮年会活動のようすを会報で紹介したいと思っています。

壮年会だより

令和3年12月「秋冬号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 32



新型コロナ(ウイルス)という名前は、王冠を意味する英語、クラウンが語源です。その表面に大小の突起が規則正しく並び、王冠を上から見た形に似ていることに由来します。

また、皆既日食で黒く見える太陽の周りに輝いて見える光の環を、太陽コロナ(光輪)といいます。そして同じ光の輪であるならば、「彌陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり 法身の光輪きはもなく 世の盲冥をてらすなり」(浄土和讃)の光輪であってほしいものです。

【住・職・閑・話】



食べ物の好き嫌いが激しく、極度の偏食である息子に、栄養バランスのとれた食事をさせるのに日々苦しんでいます。

とにかく食べず嫌いであるために、一度も口にしたことのないものを自分から進んで食べようとは決してしません。

あるとき、頂き物の珍しい果物を息子と食べようと皮をむいて息子の前に置きましたが、いつもの通り口を真一文字に閉めて、食べることを拒みます。

あまりに甘くて美味しいものだったので是非とも味わってもらいたい、「南の国のお日様の光をいっぱい浴びているから、とっても甘いよ」と言っても知らんぷり。今度は少し大げさに「これ本当に甘いなあ、美味しいなあ」とわざと息子に聞こえるように言うと、息子も少しずつ興味が湧いたようです。それでも「食べてみる?」と聞くと、顔を横に振るので、こちらも策を講じることにしました。少し間を開けて息子がテレビに気をとられている隙に、果物の一部を息子の口に入れました。最初はビックリして、ちょっと怒った様子でしたが、すぐに「あま〜いもつとちようだい。」と満面の笑みを見せて、おかわりをねだってきました。

体験したことのない人に、自分の体験した感動を伝えるということは、大変に難儀なことです。私が最初にしたよう

に、なぜこの果物が甘く育っているかをあれこれ説明しても、息子の舌が甘みを感じることはありません。また、果物の美味しさをいただいた感動を、言葉を尽くして伝えようとしても、実際にその果物を息子が口にするとその感動が伝わることはありません。

結局は本人が果物を食べるという体験をして、味わうことでしか、感動や喜びを共有することはできないのです。

「法味愛樂」という語にあるように、仏法を聞くとはお経の御文や解説書を覚えるものではなく、「味わい喜ぶ」ことこそが大事です。「お念仏をしたら何かいいことがあるのか」、「仏さまにすべてまかせよと言ったって何処にいるのか分からない仏さまにまかせることなどできるものか」と自分の知識や経験を通して、仏法を理解しようとしても、仏さまのおさとの心を知ることはできません。

お聴聞をとおして、わが身にかけられた阿弥陀さまの願いとはたらきに気づき、お念仏申すなかにその願いとはたらきが、今、間違いなくわが身に届いていることを味わわせていただくのが浄土真宗のみ教えです。

親鸞聖人が「阿弥陀さまのご苦勞はすべて私一人を救わんがため」と、自らの身にあって味わっておられるように、仏法は何よりも強い力となって、わが「いのち」をささえて、人生をどこまでもご一緒して下さいます。

壮年会会長あいさつ 今年の壮年会活動について



今年度のこれまでの壮年会活動について報告します。ご存知の通りコロナ禍により多くの中原寺行事及び門信徒会行事が中止になり、11月6日に実施した清掃奉仕活動以外は役割を果たせませんでした。

壮年会法座は4月4日(日)、6月6日(日)、7月3日(土)、11月6日(土)、『仏説阿弥陀経』を法座テーマに住職を講師として行われました。『浄土真宗辞典』に、このお経の説明がありますので、少し長いですが、引用します。

「正宗分は大きく三段に分けて見る事ができる。初めの一段には、極楽浄土の麗しい莊嚴(注1)相と仏・聖衆の尊い徳が示される。

次に、この浄土には自力の善根では往生できないので

あって、一心に念仏することによってのみ往生できると説かれている。終わりの一段には、東西南北、上下の六方におられる諸仏が、この念仏往生の法が、真実であることを証誠(注2)し護念している」

12月の壮年会法座は12日(日)です。「経」の正宗分の第2段“念仏による浄土往生”ですので、顕彰隱密(注3)について関心の有る方は是非ご参加ください。 合掌

(注1) おごそかにきちんと飾り付けること
(注2) 真実であることを証明
(注3) 文の表面に見える意味と裏にかくされているひそかな意味